

書評

浅川 滋男 著

『住まいの民族建築学
— 江南漢族と華南少数民族の住居論 —』

宮内 貴久*

「民族建築学」という耳慣れない言葉を表題に掲げている本書は、建築学者である著者が中国で進めてきた調査研究をまとめあげたものである。建築学では、1980年代後半より異文化研究への関心が高まり、現在では海外調査研究も盛んになりつつある。著者は、1980年代初期から海外での比較的長期間のインテンシブな調査を始めた研究者であり、いわば建築学における異文化研究の先駆者の一人とも言える。そこで、本書の紹介を始める前に、まず、1980年代以降の建築学界における異文化研究の動向を簡単に紹介していき、その上で本書の紹介をしていきたい。

建築学界において、異文化研究への関心はもちろん戦前からあったが、海外での調査に基づいた研究が始まったのは1970年代後半から1980年代に入ってからである。特に異文化研究としての建築学が意識され始めたのは、1983年に国立民族学博物館で開かれたシンポジウム「日本の住まいの源流」からであろう。このシンポジウムでは、民族学、民俗学、地理学、考古学、建築学などを専攻する研究者による、日本の民家の起源、系譜についての議論がなされた。建築学では、太田邦夫氏が総括をしており、著者も参加している。「エスノ・アーキテクチャー」という言葉が語られるようになったのはこの時期からである。

1988年には建築学会の機関誌である『建築雑誌』誌上で特集「エスノ・アーキテクチャー」が組まれる。その冒頭で、「モニュメンタルな建築や、西欧中心の近代合理主義的な建築を目指すことで発展してきた従来の建築論や建

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

築技術の蓄積だけでは、これからの多様で、多元化する世界の建築事情に対応していくわけにはいかない。そこで、日本の地方を含めて、世界各地のこれまではほとんどわれわれに知られてなかった無名の建築の中にも、それぞれ固有の建築技術や建築文化があって、それをいわゆる近代科学とか、西欧社会的な建築観だけで捉えるのではなく、より多元的な価値観で評価し直す必要がある。(後略)」とあり、民族学、人類学への関心とともに、「エスノ・アーキテクチャー」(Ethno-Architecture)なる新しい領域の可能性を論じている。この特集号では、太田邦夫氏が司会で、「エスノ・アーキテクチャーとは」と題する座談会が開かれており、著者も参加している。著者は、「エスノ・アーキテクチャー」という言葉自体になじんでないと発言し、「(前略)ある村なり社会に入って、そこの伝統的な住宅ないし建築というものを深く理解したい。そのためのいいモノグラフを書きたいと思っているわけです。そのときにどんなまなざしを持てばいいのか。(後略)」と方法論的な関心を示し、いわゆるコスモロジー研究への批判をし、モノグラフ的な研究を指向していることを表明している。

同年には日本建築学会大会で『住居・集落研究の方法と課題:異文化の理解をめぐる』と題するシンポジウムが開かれ、その方法論上の問題などが議論される。そして、このシンポジウムをふまえて、著者は「中国の民家・住居史研究」という論考で発表している。また、著者と同世代で前述したシンポジウム、座談会にも出席している佐藤浩司氏は1989年に『建築史学』誌上の学界動向で、「民族建築学/人類学的建築学」と題し、「エスノ・アーキテクチャー」論に対してその方法論上の問題と見通しを述べている。

1989年の佐藤論文以降は、建築学における異文化研究に関する理論的な論考はあまり発表されていないようだが、海外調査研究への

関心は高まり、海外での調査研究が盛んになり始める。中国関係に限っても、東京工業大学の窑洞住居の研究、東京芸術大学の中国住居グループによる中国東南部の調査研究などがある。

このように、建築学界において、「エスノ・アーキテクチャー」という領域が開拓され始めたのは、近代への反省とそこから非ヨーロッパ社会への視線が生まれたのである。多くの建築家達が、西欧だけではなく、アジアを中心とした海外への関心を持ち、様々な形で海外での見聞を高めていく。しかし、大部分の建築家による海外調査研究は、極端に言えば、異文化理解というよりも、そこで頭を冷やして、自分の仕事、作品を見直すという作業とさえ言えるだろう。この分野に関わった建築家は、建築史を出自とする研究者というよりも、計画系、デザイン系の者が多い。

それでは、本書の紹介をしていきたい。本書は大きく三部に分かれ、10章から構成されている。第Ⅰ部は江南漢族の伝統的住宅の民族誌的記述と分析、第Ⅱ部は中国とその周辺地域における高床式建築について、発掘資料と民族誌資料を総合させながら、系譜論的な比較研究、第Ⅲ部は華南の少数民族地域における伝統的住居とその変容を考察する、という構成となっている。各章の内容は、以下の通りである。

序 民族建築の視野と方法

第Ⅰ部 江南漢族の住まい

第1章 住空間の民族誌—江南漢族の伝統的住居

第2章 “灶間”のフォークロア(1)—カマドと台所の生態学

第3章 “灶間”のフォークロア(2)—カマドと住空間の象徴論

第Ⅱ部 高床式建築の民族史

第4章 銅鼓系青銅器にみえる家屋の表現

第5章 漢代までの高床式建築—四川と福建

第6章 南中国の先史住居—住まいの多様性および高床式建築の起源をめぐる考察

第7章 高倉の民族考古学

第Ⅲ部 華南少数民族の住まい

第8章 海南島の住まい—巢居・覆盆・分棟型住居

第9章 住まいにみる貴州トン族の漢化とエスニシティ

第10章 雲南省・永寧モン人の住まい—母系社会の居住様式と累木式構法に関するフィールド・ノート 結び 民族建築から応用人類学へ

序では、民族建築学の方法論と対象について述べられている。「住居の民族建築学」とは、おもに「未開」社会の伝統的住居を対象とした、居住の原点(人間にとって住まいとは何なのか)をさぐる研究であるとされる。「異文化社会」でのフィールド・ワークという実体験を重視する(実体験主義)。民族建築とは民族科学の方法論の延長上にあるとされ、「モノとしての建築を対象とせず、建築という物質文化の背景にある民族知識の理解をめざす」とされる。そして、対象となる建築と社会が「生きている」ことを尊重し、その歴史を復元的に考察するよりも、あくまで現在学的な記述と分析に第一の目標(現在学的視点)をおくとしている。そして、歴史との関係について触れられ、民族考古学と歴史学を総合するような形で、より実証的な民族建築史の再構成が可能であるとされる。

第Ⅰ部「江南漢族の住まい」は3章から構成されている。

第1章では江南漢族の伝統的住宅の呼称と概念、平面の類型、家具と室空間の構成、住空間利用の規範と解体などが記述され、江南の住居にみられる公的領域/家族的領域といった空間論的(コスモロジー)な分析が行われている。

第2章では、カマドを中心とした台所の著

者の豊富な調査資料が盛り込まれており、資料だけでも非常にすばらしい。これらの資料に加えて考古学的資料を駆使して、カマドの発展と多様化の足跡が論じられている。

第3章では、カマド神信仰の歴史と民俗について、史料、習俗から述べられる。カマド神が家の運命を左右するほど尊敬される一方で不浄な神、不敬であるとされる、カマド神信仰の矛盾を指摘し、台所空間の象徴性を論じている。そして、飯島吉晴氏の論文を援用して、日中カマド神の共通性を指摘し、住まいにひそむ普遍的特性について言及している。

第I部は「民族誌的記述と分析」を意図した部分であり、前述したように、著者はモノグラフ的な研究への関心を持っており、現在の学術的な研究、イーミックな視点を強調している。しかし、ある地域のモノグラフとして第I部を読むのならば、住居に関する所はともかくとして、親族組織、社会組織、生業形態、宗教といったデータが不十分であると言わざるを得ない。また、序で「物質文化の背景にある民俗知識の理解」を主張しているが、第1章で行われた公的領域／家族的領域といった空間論的分析が果たしてどれだけ、民俗知識の理解に有効であろうか。第2章で展開された、民族学・民俗学でいうところの象徴論、境界論による分析も、著者の言う現地人の視点、イーミックな視点「ある社会における居住環境の構成原理を内在的（イーミック）にみちびきだす作業」がこの分析だとしたら、不満が残るところである。

第II部「高床式建築の民族史」は4章から構成されている。

第4章では、家屋を表現する図像資料を集成し、青銅器文化にみえる建築の特質について言及している。西南中国から東南アジアに渡る広い範囲の資料を駆使して、その系譜関係を明らかにすることに力が入られている。そして、東アジア、オセアニアに渡る広大な

地域の青銅器文化にみられる家屋図像が先史・古代日本の家屋図像と密接な系譜関係があると指摘している。

第5章では、発掘遺構、出土画像資料から漢代までの四川の高床式建築の特質について論じられ、祭儀の舞台となる家屋などの検討から、閩越の社会・文化が、四川や雲南以上に漢化が進んでいたことが明らかにされている。

第6章では、安志敏によって有名となった「北方＝竪穴／南方＝高床」という先史中国の住居のイメージに対する疑問から出発する。各地の代表的な建築遺構の検討と構造的特質の整理とその分布の検討から、環境適応的な解釈の限界を指摘し、住居建築の担い手としての民族集団に対応して家屋型式が多彩であることを明らかにし、安志敏の二元的分布概念を否定している。

第7章では、高床式倉庫と群倉を非常に広範囲の資料から相対的な視野から捉え、その系譜と社会的意味について論じている。系譜関係についての部分が多く、日本の弥生期の高床建築は華南・朝鮮半島南部、奈良期の校倉建築は高句麗から伝わった北方ユーラシアの要素であることなど興味深い。系譜的には、華南南方系の高床式建築と東北アジアのそれとは機能、構造とも差異があり系譜関係が想定しにくいとされている。そして、倉庫は単にモノを収納するだけでなく、祭祀的存在であり、政治的手段であり、その在り方は時代、民族、地域の状況によって表出することが主張されている。

第II部は「民族考古学と歴史学を総合するようなかたちで、より実証的な民族建築史の再構成」を意図する論考から構成されており、発掘資料と民族誌資料を駆使する著者の方法は大胆であり、目を見張るものがあり圧倒される。様々な資料からその系譜を論じていく手法には目を奪われる。特に第6章で明らかにされた先史中国の住居イメージを覆すあた

りは非常に興味深かった。しかし、その反面、その大胆さ故に戸惑いを覚えるというのも正直な印象である。また、著者の言うところの民族建築史というものが、建築の系譜論であるのかという疑問が残った。系譜論が民族建築史の重要な領域であるとしたならば、従来の考古学、文献史学といった歴史学が展開してきた議論あるいは方法論とどのような関係にあるのか疑問を感じる。第7章の後半で展開された倉庫をめぐる議論の中で触れられた、建築が時代、民族、地域的狀況にそくして表れるといった問題の方が、民族建築史としては重要な問題となるのではなからうか。

第Ⅲ部「華南少数民族の住まい」は3章から構成されている。

第8章は、H. スチューベルの『海南島民族誌』をたたき台にして、文献資料と調査資料から、海南島に住むリー族の住居の類型と地域性を明らかにし、各類型の系譜について考察されている。H. スチューベルがリー族の分棟型住居をオーストロネシア語族の型式としたのに対して、華南漢族のL字型農家が土着的に変容しリー族に波及したと結論し、オセアニアの分棟型の住居との間には系譜関係がないとしている。

第9章では、貴州省のトン族を取り上げ、諸民族の住居、倉、火処などを比較しつつ、物質文化にあらわれた民族文化相互の重層性と各民族文化の固有性を抽出することが試みられている。これは民族学でも最近注目されている「漢化」の問題を、住居を通して建築学から検討した論考である。貴州省の少数民族の住居を取り上げ、その系譜関係、高床住居の類型、諸民族の住居の比較が検討される。そして、トン族の住居の平面形式にみられる<前→中→後>タイプが古式かつ固有の「典型」平面であり、<右←中→左>タイプは漢族住宅の影響を受けた新しい平面形式であることを明らかにしている。著者は住居にみられる変動的要素と保守的要素を取り上げ、保

守的要素こそがエスニシティを反映するものであり、トン族の場合は高床居住という居住形態がそれであると指摘している。

第10章では、西北雲南のモン族の住居空間と居住様式の素描、累木式構法について論じられている。モン族はアチュ婚と呼ばれる婚姻形態を持ち、母系拡大家族という親族体系を持つ民族である。本章では、まず文献資料による民族の起源について論じられる。次に調査資料から、モン族の住居空間と居住様式について、特に親族関係を軸にして論じられる。そして、モン族の住居の空間構造を象徴二元論から検討され、(+)^女 右 私 / (-)^男 左 公という図式が提示される。その後、累木式構法について触れられている。

第Ⅲ部は華南の伝統的住居とその変容についてまとめられた章ではあるが、第Ⅱ部を一部引き継ぐかたちで、民族建築史の再構成という作業が行われており、第8、9章では「漢化」という問題を扱っている点が注目される。第10章では2つの事例からモン族の住居について論じられているが、資料不足という点は否めない。また、象徴二元論を援用しての、住居の空間構造が提示されているが、再三指摘しているように、民俗知識を理解するのに、こうした方法論が有効であるか疑問である。そして、「女と水、男と火」という構造が解釈できないと著者は述べているが、モン社会における男女の分業、信仰体系といった十分な民族誌的資料なしに、安易に考察するのは勇み足ではなからうか。雲南に関しては調査が継続中で、すでにその一部は発表されている。今後の調査資料の蓄積と研究に期待したい。

著者は建築学界、特に建築史学界での異文化研究の高まりの中で育ち、海外での比較的長期間住み込んでインテンシブな調査を行った世代の先駆者である。中国研究以前には、「ウートがたちあがるまで—トラック諸島トルー島におけるウート建設過程の報告」とい

う優れた民族誌的研究がある。本書の序、結びで主張される「実体験主義」「現在の学的視点」「ある社会における居住環境の構成原理を内在的（イーミック）にみちびきだす作業」「近代への反省」「応用人類学」という民族建築学の方法と対象はこうした中国研究以前の背景があると考えられる。しかし、本書を読んだ印象としては、著者が関心を持っているのは民族誌的研究よりも、民族建築史の再構成にあるように感じられる。それは、本書の構成にも表れている。

本書は江南漢族と華南少数民族の住居に関する論文集であり、後書きにもあるように、著者の学位論文の主要部分をまとめたものである。民族建築学という題名ながら、本書の第Ⅱ部から第Ⅲ部は、「民族考古学と歴史学を総合するようなかたちで、より実証的な民族建築史の再構成」を試みることに、本書のほぼ三分の二が割かれている。著者も述べているが、奈良国立文化財研究所での考古学者との学問的交流が、こうした考古学的な研究の背景にあり、著者の学風を形成したのである。

建築学からの異文化研究の方法論的文脈で本書を捉えると、「エスノ・アーキテクチャー」から佐藤氏による「民族建築学／人類学的建築学」の延長線上に、著者の「民族建築学」は位置する。しかし、本書の序では、佐藤氏の論考に対する検討は行われておらず、本書の内容が系譜論あるいは民族建築史の再構成を試みている点などでは、佐藤氏の展開とはずれがみられる。この点に関しては、建築学界、特に建築史学界での評価を期待したい。おそらく、今後、著者と同世代の建築学者のまとまった業績が発表され始めるであろう。その段階で、著者の主張する「民族建築学」の評価がされるであろうと考える。

もし、民族建築学が丹念な調査によって「ある社会における居住環境の構成原理を内在的（イーミック）にみちびきだす作業」という

方向を重視し進むのならば、民族学・民俗学との接点も見いだすことができるであろう。今後の展開を期待したい。

建築学からの異文化研究、インテンシブな調査研究をまとめた個人の最初の業績として、また中国という調査研究に対する制限が多い国での、住まいの調査研究をまとめあげたという事だけでも本書は高い評価を受けるであろう。一読を薦めたい。

参考文献

- 浅川滋男・佐藤浩司・関根康正・近森正
1988 「エスノ・アーキテクチャーとは」『建築雑誌』Vol. 103 No. 1273
- 佐藤浩司 1989 「民族建築学／人類学的建築学」(上)(下)『建築史学』第12, 13号
- 浅川滋男 1980 「ウートがたちあがるまで—トラック諸島トルー島におけるウート建設過程の報告」『季刊人類学』11-3号
- 1993 「雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術に関する調査と研究(1)」『住宅総合研究財団研究年報』第19号
- 1993 「中国の民家・住居史研究」『建築史学』第20号
- 1994 「雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術に関する調査と研究(2)」『住宅総合研究財団研究年報』第20号

(1994年6月 建築資料研究社 A5判 426頁)